

悠久の京を訪ねて PartⅢ Vol.5



京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。
 京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。
 私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

陶磁器の来た道 — 日本海ルート —



■ 日本海沿岸の湊 みなと

中世の陶磁器は中国との貿易により大量に輸入され、全国各地に普及していきました。これらは主に瀬戸内海ルートで京に運ばれましたが、一部は博多から日本海沿岸いに流通していることが近年の発掘調査の成果から明らかになってきています。

室町時代には日明貿易が始まりますが、外国船も幾度か日本海ルートで小浜に寄港していることが文献資料にみられます。1471年に朝鮮国王の命により、日本と琉球について書かれた『海東諸国紀』によると、1467年、朝鮮国王世祖から日本国王(室町将軍)への書と礼物を載せた船が肥前国を經由して京へ向けて出航しました。この時すでに応仁・文明の乱(1467~1477年)が始まっていたため、瀬戸内海を避け、日本海を航路に選び、4月に若狭国小浜に到着し、6月には入京しています。また、日本海側の湊として小浜浦と長浜浦(島根県浜田市)の2か所が記載されており、日本海側の窓口として機能していたことがわかります。



中国の主要な窯と日本への航路

■ 丹後地域出土の陶磁器

丹後地域では海沿いの遺跡を中心に陶磁器が出土しますが、宮津市中野遺跡やその周辺では大量の中国製陶磁器が出土しています。

中野遺跡で出土した中国製陶磁器をみると、平安時代末期は同安窯産の青磁や福建省のいろいろな窯で生産された白磁が主体ですが、鎌倉時代以降は龍泉窯産の青磁がそれにとって代わります。室町時代の中国製陶磁器には龍泉窯や景德鎮窯産の碗・皿などの食膳具のほか盤・壺・天目茶碗・香炉といった花生けや茶道具などがあり、種類が豊富になります。また、内陸部に位置する京丹後市松山遺跡では中国製陶磁器に混じって朝鮮半島製陶磁器が出土しています。この時期の出土例は少なく、貴重な資料です。

小浜の湊は丹後・若狭国の守護であった一色氏が管理していました。小浜に寄港した中国や朝鮮の貿易船に積まれた物資の一部は守護所のある宮津に入り、さらに、丹後国内各所に運ばれたと考えられます。室町時代の物流が京中心のルートだけではなく、日本海側の窓口として機能していたことがわかります。



日明貿易で輸入された青磁碗(京丹後市シミズ谷城跡出土)